

---

# 孤独な男の幻想入り

牙練

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な男の幻想入り

### 【Nコード】

N8248Y

### 【作者名】

牙練

### 【あらすじ】

家族を失い、幻想郷と言う架空の世界に縋りつく青年。  
彼はあらゆる物・事を増減する程度の能力を使い幻想入りした。  
彼は優しい。しかし、彼は現実とも折り合いを付けながら幻想郷を  
生きていく

**よく解る解説：主人公編（前書き）**

今のうちに書いておかないと後々面倒なんで。

## よく解る解説：主人公編

直人

年 20

身長 男子高校生並み

容姿 普通・黒髪・黒い瞳

性格 お人よし・優しい・意外に熱い・面倒くさがり

能力 あらゆる物・事を増減する程度の能力

詳細：能力を使い脅迫染みた行動をしようとした時、スキマに落ちた。

紫と初対面時に愚者と呼ばれる。

その後和解。

普段は無表情な顔をしている。

クールかと言うとただ単に不器用なだけである。

ここぞと言う時、感情が溢れ出す。

様は感情的。

一夫多妻を願望にしているが、叶わない夢と諦めている。

尚、鈍感では無いが自分に向けられている好意は自分に向けられている物では無い・一時の気の迷いと決め付ける。

年上には敬語を使うが、砕けた相手に使う気は無い。

無神経に人の気に障る事を聞いてしまう。

家事は基本的に出来るが、料理・洗濯はまだまだ。

能力説明：あらゆる物と事象を増減する。

物は増やしたり減らしたり出来る。

人物を増やす・減らす事は出来なくも無いが、寿命を使うので多用（と言うか使わない）しない。

持病・感情・寿命・能力・身体能力・免疫などを増やしたり減

らしたり出来る。

正し、減らす場合は必ず“1”残る。

増やす場合上限が無ければ何処までも増やせる。

……特殊な行動をした際は問答無用で全能力が増える。  
彼はまだ純情です。

弹幕：基本的には丸いが、集中すればどんな形の弹幕になる。

威力を増やしたり減らしたり出来る。

場合により一瞬で消滅してしまう程の弹幕も撃てる。

様はスペルカードルールを無視した威力もと言う事。

妖怪の賢者の論：彼は不安定な精神をしている。あの吸血鬼の妹よりは強いけど、我を忘れてしまったら非常に不味い存在になるわね……。

幻想入りする際も、脅迫染みた行動を取ったし。

余程追い込まれる事さえ起きなければ良いけど……。

よく解る解説・主人公編（後書き）

と言う設定です。

## 優しい青年の暴挙（前書き）

何も完結していない馬鹿の、何時もながらの暴走です。

## 優しい青年の暴挙

「現代の何処か」

青年は1人、生きてきた。

生まれた頃からでは無い。

ただ、姉夫婦は事故で死に両親は流行病で無くなった。

親戚は引き取ると言ってくれたが、青年は断った。

それから青年は高校を卒業した後、働いて働いて生きてきた。  
そんな生活が2年続いた。

語弊がある。

働いて働いて“能力を使つて”生きてきたが正しい。

彼がこの能力      あらゆる物・事を増減する程度の能力      を  
手に入れた出来事は、家族の死であつた。

現実に絶望し、自ら命を絶とうと考えてた矢先の時だつた。

彼は体力を増やし肉体労働をこなし、ダイエットの臨時講習の仕事を請けた際受講者の体重を減らしたり、金を増やしたり地雷を減らしたりして能力を使つていた。

彼は決して、自分の欲望を満たすために人に迷惑を掛ける事はしなかつた。

だが、それでも彼は“孤独”だつた。

彼は孤独を嫌つていた、それなのに彼は優しすぎた存在だつた。

自分では無く他人の悩み・悲しみ・憎しみを何とかしてあげたいと考える、そんな青年だつた。

表情・表面には出さないが、彼はそんな人間だつた。

だからこそ、彼は“都市伝説”に縋りたかつたのかもしれない。



PCで見たことのあるキーワード“東方Project”

全部を見た訳では無いが、隔離された世界“幻想郷”と言う世界があると言う事。

其処には少ない人間と“妖怪・神・妖精・亡霊・鬼”が住む世界と言う。

彼はそんな世界に行つて見たいと思った。

しかし、其処に行くには“忘れ去られる”と言う方法が“隙間妖怪”と言う存在に連れて行つて貰う以外に方法は無かった。

彼が其処に行きたいと強く願つたのは、家族の死だった。

もし家族が生きていたらこんな考えは若気の至りとなっていた筈だけれど、肉親が居なくなり孤独感に襲われた彼に縋るしか無かったのが幻想郷だった。

だからこそ、彼は親戚の引き取りを断り存在を忘れ去られようとした。

けど、結局上手く行かなくて

彼は幻想郷に行けなかった。

いつか行ける事を夢見て、生きてきた。

最早それは、妄信と言つべきか。

それでも彼は幻想郷に行く事を求めて止まない。

しかし、最早彼も手段を選ばずにはいられなかった。

「本当はこんな手段を使いたく無かったが……。」

前記にも記した通り、彼は私利私欲の為に人に迷惑を掛けたくないと考えるお人よしだった。

しかし、彼は限界だった。

だからこんな“暴挙”に出た。

幻想郷の存在を“増やし”、俺の存在を“減らす”！

彼がそう念じようとした時。

くぱあ！

足元に“スキマ”が開いた。

青年は居なくなった。

幻想入りを果たした。

ただそれだけ。

## 優しい青年の暴挙（後書き）

今回は頭の中で自己完結しない。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？（前書き）

落ちるゝ落ちるゝ 俺達ゝ

名前は今回で解る筈。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？

（スキマ内）

彼は落ちている。

何処までも何処までも落ちていく。

不意に浮遊感に包まれた。

「ここは……？」

そう呟いた時、背後から声がした。

「ここはスキマの中よ。」

彼が振り返る。

其処に居たのは、金髪で帽子らしき物を被り、傘を持っている女性（少女？）が佇んでいた。

「まったく、幻想郷の存在を増やそうなんて、何を考えているのかしら？ ねえ、“愚者”さん？」

「……何で愚者？」

彼は疑問を口にし、女性は笑み  
仮面の  
を浮かべつつ告げる。

「それはそうよ。だって貴方  
」

幻想郷を“消滅”させようとしたのよ？

驚くほど冷たい声。

顔は笑顔なのがさらに恐怖を煽る。  
そんな状況の中、彼が取った行動。  
それは

「え？」

彼は地面に頭を付け、ひれ伏した。  
土下座である。

「すまなかつた。」

心底詫びる声で謝る青年。

毒気を抜かれた女性は、啞然としたが直ぐに平常になり質問をした。

「謝る位ならしなければ良いと思うのに……。」

「まったく持つてその通りだ、返す言葉も無い。」

女性は思った。

この男、あんな大それた事をしようとしながら此処まで謝る  
と言う事は

「貴方は幻想郷に来たかったのかしら？」

ビクリッ！と彼が身体を震わせる。

その様子は、母親に叱られる前の子供に見えた。

女性はため息を付きながら、理解した。

（様は幻想入りしたくて、でも出来なくて仕方なくって所かしらね。）

女性はこの青年をどうするか決めかねていた。

幻想郷を消す力を持つ存在を受け入れる、それはかなり危険な賭けね

けれど、女性の答えは決まっていた。

「良いわ、許してあげる。」

「……………え？」

「正し、条件を付けるわ。」

「条件？」

其処まで言って女性はもったいぶる様な  
悪戯を思いついた子供の様な  
素振りを見せる。

「……………条件は？」

「条件は」

幻想郷の起爆剤、もしくは投じられた一石になる事

それが女性の条件だった。

注意事項も付いてくる。

「正し、外の技術を広めない事。里の人間が外の世界に興味を持ち始めたら幻想郷は消滅する。」

「何故？」

「簡単な話よ。幻想郷は元々行き場を失った妖怪達の最後の樂園なのよ。外の技術が発展すると共に妖怪は存在しない生き物となった。いえ、“最初から居なかった”とされてしまったが正しいかしら。」

「……………現代社会が妖怪を追放したって訳か……………」

「幻想郷に人間が居る理由も知りたいかしら？」

試す様な目で女性は問う。

青年はその目を逸らさず答える。

「是非。」

「よろしい。本来妖怪は“人の恐怖”から生まれた存在であり、人が恐怖しなければ妖怪は存在しない事になる。だから妖怪は人を襲い、人は妖怪を恐怖した。」

「幻想郷は“人間を飼い殺す”世界って事か？」

「……間違いでは無いわね。幻想郷は人と妖怪が共存してる世界とは言っけれど、実際は妖怪が人間を見下している様な物ね。もっとも最近はその認識を改めてはいるけれど、全員がそう思っている訳では無いのよ。」

「だからあんたは俺に起爆剤になれって言ったのか。そういった角質を無くし、平等で対等な世界を作らせる為の。」

「まあ、幻想郷内で悩み・苦しんでいる人や妖怪を助けても問題ないわ。」

青年はふと思う事がある。

「なあ、俺は“危険”じゃないか？」

「……………」

作り笑いを浮かべ、黙する。

「正直に言ってくれないか？」

真剣な眼差し。

女性は表情を何とも言え無い顔にする。

「正直言って、貴方は危険よ。危険所じゃない、下手すれば“爆弾



”を抱える様な物よ。」

「なら、何で…。」

「……それはね、幻想郷が“全てを受け入れる”からよ。」

もつとも、最初から危険な奴は入る前、入った後滅するけどね

そう言つて、とびきりの笑顔を見せる。

「……それにね、似てるのよ貴方は。」

「似てる？」

「ええ、私の知り合いにね。」

後は、貴方が寂しそうな目をしていたからかしら

青年は目を見開く。

「何……で……！？」

「………解るわよ、長く生きてますもの。」

「………そうかい。」

「何があつたか、何に絶望したかは聞かないでおくわ。」

「すまん……。」

その後、幻想郷について色々聞いたり、スペルカードルールなどを教えてもらった青年。

「ふう、久々に説明するから疲れちゃった。」

「あゝ、何かすまん。」

「良いわよ別に。しかし、貴方つて謝つてばかりね。」

「………負い目があるからな。」

「それもそうね。」

「所でさ。」

「何かしら？」

「お互い自己紹介して無いよな？」

「うふふふふふふふ！」

「くくくくくくくくく！」

2人して爆笑する。

それから互いに自己紹介をする。

「俺の名は直人。名字は捨てた。」

「私は八雲 紫と申します。」

「何故敬語？」

「ノリよ。」

そうして、そろそろ幻想入りするかと思いきや紫が質問してきた。

「貴方は夢とかあるのかしら？」

「……………下らない願望なら？」

「お聞かせくださる？」

「勘弁しよ」「駄目」「……………」

少し躊躇した後、蚊の鳴く様な声で“願望”を言った。

「……………一夫多妻。」

「……………」

紫は沈黙していた。

「な／＼／＼！わ、悪いかよ！？」

「……………うふふ」

「何だよその笑い！？笑いたければ笑えば良いだろう！」

「いえね。別に深い意味は無いわよ？」

「嘘だ！」

「まあ、そこら辺は男の子って事で」

「俺は20だ！」

「あらい外！背が小さいから18歳かと。」

「うがあああ！」

直人は身悶えている！

「まあまあ、幻想郷には美人・美少女がいっぱい居るわよ？勿論私も美少女だけど」

「……………美少女？」

その瞬間、空気が死んだ。

地の底から聞こえてくる様な声で、紫が聞いてくる。

「何か文句でもあるのかしら？」

「イイエメツソウモナイ。」

とりあえず、いよいよ幻想入りする事となった直人。

「じゃあ、博麗神社に落とすわよ？」

「結界の管理する場所だっけ？」

「そうよ。……………今はまだ期待できないけど、期待してるって言わせなさい。」

「女たらしでも良いのなら。」

「ふふ。それじゃあお決まりの台詞を1つ。」

幻想郷へようこそ

くぱあ！

直人の足元にスキマが開いた。

「落ちて行くのかあああああああ！？」

「当たり前よ。私の素を見た代償よ。」

こうして、直人は幻想入りした。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？（後書き）

紫の口調がこれで合っているか心配な件。

今回の設定は元ネタがある。

ニコニコ動画『東方星母録』の出来事が元ネタ。

知りたければ見れば良いと思うが、超憂鬱展開があるから半端な気持ちで見ない事。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（前書き）

博麗神社に落ちた直人。

空中から地上まで1 m位。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！

（博麗神社・境内前）

此処は博麗神社。

結界の要の場所であり、“異変”を解決する巫女が住んでいる。

その名は“博麗 霊夢”と言う少女だ。

この少女、色々と怖い存在でもある。

異変解決の為なら原因らしき存在を倒し、行く手を阻む者や進路に立った者も倒して進む。

冷血・冷酷と言う訳では無いが、解決する為なら手段を選ばない。もつとも、解決した後は宴会を神社で開く事が最近の日課になっている。

尚、彼女の神社は貧乏である。

…………… 自給自足をしていると言う噂もある。

そんな霊夢は今日も賽銭があるか確認した後、箒で境内前を掃いていた。

「ふう、最近暇ね……。参拝客も来ないし……。」

この前の異変“神霊廟異変”を解決したのだが、これと言って平穩が続いていた。

「ふう……。ん？」

その時、目の前にスキマが現れた。

ドスンッ！

そんな音が聞こえた。

スキマから何か落ちてきたのだ。

それは人間の男性だった。

「……………」。(ピクピクッ！)

顔面から落ちたので、かなり痛いと思う。

霊夢は警戒しながらも少し慌てながら安否を気遣った。

「だ、大丈夫？」

返事はこう返って来た。

「大丈夫……だ……、問題……無い……。」

グッ！と親指を立てる直人。

「案外タフね。」

直人の隣に上半身をスキマから出している紫がツッコむ。

「ちよつと紫。これ何よ？」

「幻想入り希望者よ。」

「意味が解らないんだけど……。」

「まあまあ、どの道外の世界で能力が覚醒してたみたいだから、一応この世界に連れて来たのよ。」

「……………こいつの能力は？」

「……………あらゆる物・事を増減する程度の能力よ。」

霊夢は直人を見据える。

あの紫が幻想郷に危害を及ぼす存在を連れてきた？

霊夢にとってそれは考えもしない出来事だ。

「勿論条件付きだけどね。」

「条件？」

「まあ、幻想郷の今の角質を何とかして欲しいって言うね。」

「無理でしょ？紅魔館の面々は少し認識を改めているけど、野良妖怪はそうもいかないわよ？」

「だからこそよ、私はこの男の“可能性”を見てみたいのよ。」

扇子で口元を隠し微笑む。

「……………あんた、何か悪いものでも食べた？」

「失礼ねえ。ちゃんと藍の料理を食べてきました。」



「じゃあ何でこんな奴を信じるのよ？」

「そうね……、一目ぼれかしら」

「……………似合わない。」

「まあそれは冗談として、初対面の私の 殺気を放った私の

素を見たのよ？」

「珍しいわね。あんたが崩されるなんて。」

「自分のした事にちゃんと自覚を持ち、非があるのを理解して謝罪してきたのよ？信じるに値するわよ。」

「ふゝん……、それより何時までそいつはその状態なの？」

落下時からその体勢な直人。

まあ理由はだ。

「あゝと……、なんかシリアスだったんで立つに立てなくなりました……。」

「はあ、まあ良いわ。私は博麗 霊夢、この神社の巫女よ。」

そう紹介されたので、直人は立ちあがり紹介を返す。

「直人だ。名字は捨てたので無い。」

「あら？何でよ？」

「まっ、色々あったんだよ。」

「八雲の名字居る？」

「謹んでお断りします。」

「あらつまらない。」

そんな会話をしてる内に、時刻は昼頃になった。

紫はスキマで家に帰った。

霊夢は紫に頼まれて直人を住まわす事にした。

「良い？雑用はやって貰うわよ？」

「解った。」

「しかし、とんだ暴拳に出たわね……。其処までして幻想郷に来たかったなんて。」

「まあ、あつち少し息苦しいからな。」

「と言うか、女誑しって何よ。」

「悪いかな？」

「襲ってきたら潰すわよ？」

「無理やりとか趣味じゃ無いからこつちから願ひ下げだよ。」

「ふう、食材足りたかしら？」

「無いの？」

「3日分しか無いのよ……。買い物行かなきゃ。」

「ちよつと食料見せて。」

「……1人締めは許さないわよ。」

「しないっての。」

〔博麗神社・台所〕

外の世界と同じ作りだった。

「何故に？」

「あのね、流石にそこら辺は普及してるわよ。」

「電気とか水道も？」

「ええ、たしか妖怪の山と霧の湖からかしらね。」

「何か凄い名前出てくるな。」

「覚えておいた方が良くいわよ。後で教えてあげるから。」

「うい。」

直人は冷蔵庫を開けた。

「少ないな。」

「うるさいわね。家は貧乏なのよ。」

「酒を製造してるって紫さんから聞いたぞ？」

「それはそれ、これはこれ。」

「お約束だな。まあ良いや、とりあえず“増えろ”」

そう言うと、食材が“新品同様”になって増えていた。

「な!？」

「これが俺の能力だ。使い道は色々あるが、食材を増やすつてのは外でもしてきたからな。」

「ね、  
ね  
ね  
ね  
え  
え  
え  
え  
え  
え  
？  
？  
？  
？  
？」

「**落ち着け。**」

「お金も増やせるの？」

「出来るぞ、しかも新品。」

「……………ちよつと待つてなさい！良い！あんたは今日から博麗 直人と名乗りなさい！はい決定！」

「ちよつと待てえええ！？何故に！？」

「便利!!!」

「ちったあ本音を隠せ！！！」

「イヤッホーイ これで脱貧乏よおおお！」

こうして、霊夢は狂喜乱舞をしながら金を取りに行った。残った直人は呟く。

「俺、幻想郷生活が不安になってきた……。」

こうして、幻想郷での生活が始まった。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（後書き）

霊夢のキャラが崩壊してる様な……。

まあ良いか。

妖怪の恩恵があるから自給自足出来るらしいんだけど、誰かが貧乏とか言った所為で貧乏になったとか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8248y/>

---

孤独な男の幻想入り

2011年11月25日17時50分発行